

ながお こうじろう  
薬品物理化学分野 准教授 長尾 耕治郎

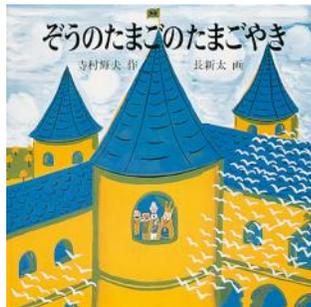
『ぞうのたまごのたまごやき』

寺村輝夫 作、長新太 画

福音館書店（1984年）

私が紹介するのは、寺村輝夫さんの絵本「ぞうのたまごのたまごやき」です。大学生に紹介する書籍として絵本とは、と思われる方もいるかもしれませんが、少々お付き合いください。

王様の家に赤ちゃんが産まれました。それをお祝いするために、国中の人に王様の大好物である卵焼きをふるまうことになりました。しかし、国中の人のために卵焼きを作るにはたくさんのたまごが必要です。そこで王様は大きな生き物のたまご、つまり象のたまごを使えば良いのではと思いつきます。王様はそのアイデアに満足しており、大臣達も王様のために準備を進めます。ある大臣は大きな卵焼きを作るための大きなフライパンと大きなかま



どを作りました。また、別の大臣は象のたまごを求めて森へとくり出しました。フライパンとかまどの準備は順調です。あとは象のたまごが見つければ大きな卵焼きを作ることが出来そうです。象のたまご？ところで、象はたまごを産むのかな？

小学生の頃に「かいぞくポケット」や「こまったさん」シリーズを夢中になって読んでいた私にとって、寺村輝夫さんは大好きな作家の一人です。その寺村輝夫さんの絵本を大学を卒業してからの恩師に紹介頂きました。寺村輝夫さんや私の恩師が本書で伝えたかった本当のメッセージはわかりませんが、基礎研究を行う私に多くのことを考えさせてくれた絵本です。私たちが大学で行う研究においても、時によっては“あるはずのない”象のたまごを探していることがあるかもしれません。しかし、教科書に書かれていないことを明らかにすることが研究の醍醐味ですし、新たな発見は教科書を書き換えます。教科書に載っていない象のたまごを見つけたら、それは大発見です。

また、物語では王様たちは象のたまごを見つけることが出来ませんでした。かわりに素敵なものを手に入れます。研究でも予想外のものを得ることがありますし、初めに考えた事とは異なる方向に進むのが世の常です。ところで、象のたまごは本当に存在しないのでしょうか？どのような王様だったら象のたまごを見つけれられたのかな・・・とも考えさせられた絵本です。

とみまつ なつき  
事務局 企画・広報課 富松 南月

『星の王子さま』

著者 サン・テグジュペリ 訳者 管 啓次郎

KADOKAWA/角川文庫（2011年）

世界的にも有名なこの本、読んだことがあるという方も多いのではないのでしょうか。私が「星の王子さま」と初めて出会ったのは中学一年生の時でした。

主人公の「ぼく」は飛行機のパイロットです。ある日、ぼくの操縦する飛行機が故障しサハラ砂漠に不時着してしまいます。そこで出会うのがタイトルにもなっている星の王子さまです。王子さまは自分の星で大事に育てていた「バラ」と喧嘩をし、星を飛び出てきたのでした。ぼくは王子さまがここに来るまでに巡ってきた星の話聞きながら飛行機の修理を進めます。ここで語られる星のお



話がとても印象的で、メルヘンチックなイラストからは想像できないような、ちょっと嫌なキャラがたくさん登場します。威張った王様や自分への褒め言葉しか聞こえない自惚れ屋、嫌なことを忘れるためにお酒を飲み続ける呑み助など様々なキャラクターと出会い、別れ、王子さまはちいさな自分の星では学べなかったことをたくさん学びます。

中でも私が一番好きなシーンは王子さまが美しく咲き誇るバラ園に辿り着き、世界には自分の星の「バラ」以外にもたくさんの「バラ」が居ると知るシーンで、そこに居合わせたキツネが言う「きみのバラが、きみにとってかけがえのないものになったのは、きみがバラのために費やした時間のためなんだ」というセリフです。このセリフは人と人の関係はもちろん、趣味や勉強、仕事にも言えることだと思います。一生懸命何かと向き合った時間は皆さんの中でも特別な意味を持つものになっているのではないのでしょうか。

ここで紹介したものはほんの一部で、他にもたくさんの素敵な言葉と出会える本です。こんなにも有名な本を今更紹介するのも憚られるのですが、私自身大人になって読み返し、これらの言葉の聞こえ方が、大きく変わる経験をしました。昔読んだことがあるという方も、まだ読んだことがないという方も、星を巡るように出会いと別れを繰り返してきた方にこそ、今一度立ち止まり読んでほしい一冊です。